

日本中國學會報 第七十二集  
二〇二〇年十月十日 發行 拔刷

中國語「流水文」とその修辭的特徴について

橋本陽介

# 中國語「流水文」とその修辭的特徴について

## 橋本陽介

### 一、はじめに

次の文は高行健の『靈山』の冒頭部分である。

(一) 你坐的是长途公共汽车, 那破旧的车子, 城市里淘汰下来的, 在保养的极差的山区公路上, 路面到处坑坑洼洼, 从早起颠簸了十二个小时, 来到这座南方山区的小县城。(おまえが乗ったのは長距離バスだった。都會でお拂い箱になったボンコツ車が、補修の行き届いていない山道を走る。路面はデコボコだらけ。朝から十二時間揺られ續けて、ようやくこの南方の山間の縣城に着いた。)<sup>(1)</sup>

この文について橋本陽介は「最初の文で長距離バスというイメージを提示すると、次に焦點は古い車體に移動し、そして次のまとまりではその車體の説明になる。それから焦點は道に移動し、その道の説明を次の言葉のまとまりに擔當させる。さらにつぎのまとまりでは道がでこぼこなことから連想される「揺れる」ことが述べられ、次のフレーズで到着が示される。このように「焦點あわせ↓その説明／描寫／イメージ↓別のものに焦點あわせ」と續く。」と説明したほか、『靈山』の文體を高行健自身の言う「言葉の流れ」として分析している。<sup>(2)</sup>

高行健の言う「言葉の流れ」という用語は、直接的には「意識の流れ」や、バフチンの理論などの影響を受けたものと思われるが、高は同時にその文體について、中國語がもともと持っている特徴を用いたものだとも述べている。<sup>(3)</sup> いったいそれはどのような特徴であろうか。

言語學における研究では、(一) のような文の特徴について、呂叔湘が「流水文」と呼んだ。呂の言う「流水文」とは、中國語では「一つの節に次の節が續くが、多くのところではそこで終わりにしてもいいし、續けてもいい」という特徴を持つことを言ったものである。<sup>(4)</sup> ただし、形式的に嚴密な定義がなされているわけではない。多分に印象でそう呼んだものであるが、確かに中國語では「流れる水のように」に文が展開することがしばしばある。なぜ、中國語のある種の文は「流れる水のように」に感じられるのだろうか。本稿では、以來「流水文」と呼ばれたような文に現れる中國語表現が、小説文においてどのような修辭的な特徴を擔っているのか、その一端を明らかにすることを目的とする。

## 二、「流水文」の言語學的特徴

呂淑湘がその名稱を生んで以來、その後の言語學における先行研究では、「流水文」とは、多くの節からなる複雑な文で、その節間の結びつきが相對的に弱く、なおかつ接續詞等も使用しないような文であり、たいていは多くの主語を持つものであるとされる。<sup>(5)</sup>

橋本陽介は「流水文」とされたような文を考えるにあたって、Givónの言う「連續」の概念を導入すべきだとした。<sup>(6)</sup> Givónは、文法的複雑さを得る手段として、「埋め込み」と「連續 serialization」の二種類があるとす。<sup>(7)</sup> 中國語は連體修飾や連用修飾構造、關係節など「埋め込み」の手段を相對的に取りにくい言語であり、複文における從屬節の從屬度も相對的に低い。その代わりにいくつもの動詞句が連なる構造が多いほか、以下に示すように意味的には修飾語として埋め込まれてもよさそうな成分が比較的獨立した資格で節を作る。つまり、複雑な概念を表すのに、「連續」を好む言語であるといえる。「埋め込み」と「連續」の手段の違いを、『百年の孤獨』の同一個所の異なる翻譯で示す。

(二) 一个胖呼呼的、留着拉碴胡子、长着一双雀爪般的吉卜赛人、自称叫墨尔基阿德斯，他把那玩意儿说成是马其顿的炼金术士们创造的第八奇迹，并当众做了一次惊人的表演。

一个身形肥大的吉卜赛人，胡须蓬乱，手如雀爪，自称梅尔基亚德斯，当众进行了一场可惊可怖的展示，号称是出自马其顿诸位炼金大师之手的第八大奇迹。

(手が雀の足のようにほっそりした髭つつらの大男で、メルキアデスを名のジプシーが、その言葉信じるならば、マケドニアの發明な鍊金術師の手

中國語「流水文」とその修辭的特徴について

になる世にも不思議なしろものを、實に荒っぽいやりくちで披露した。<sup>(8)</sup>

前者は「吉卜赛人」を「一个胖呼呼的、留着拉碴胡子、长着一双雀爪般的」が連體修飾している。これは「埋め込み」である。一方、後者では「一个身形肥大的吉卜赛人」とまず提示してから、「胡须蓬乱，手如雀爪」と、一部の形容を獨立させて後に連續させる形式を用いている。このように、中國語にも連體修飾や連用修飾はあるものの、そうした手段ではない方法、すなわち次々に附加していく形式で敘述することが比較的多い。<sup>(9)</sup> 別の小説からももう二例挙げる。

(三) 秋风起，天气凉，一群群大雁往南飞，一会儿排成个『一』字，一会儿排成个『人』字，等等。(秋風がたち、涼しくなると、雁の群れが「一」の字になったり、「人」の字になったりして、つぎつぎに南へ飛ぶ。<sup>(10)</sup>)

(四) 有一天她从山上下来，和我讨论她不是破鞋的问题。(ある日山から下りてきたあいつは自分ふしだらではないと議論をふっかけてきた。<sup>(11)</sup>)

(三) では「一群群大雁往南飞」(一群の雁が南に向かって飛ぶ)と動詞句で示してから、その描寫を「一会儿排成个『一』字，一会儿排成个『人』字，等等」(「一」の字を作ったり、「人」の字を作ったり)と連續させ、一つの文にまとめられている。一方、井口晃による日本語譯ではこの部分を連用修飾語に變換して翻譯しているため、「雁の群れが「一」の字になったり、「人」の字になったりして、つぎつぎに南へ飛ぶ。」となつてゐるのがわかる。つまり「埋め込み」にしているわけである。(四) は、直譯すれば「ある日、彼女は山から下りてきて、私と自分がふしだらではないという問題について討論した」となるように、動詞句の連續として表出されている。一方、日本語譯は連體修飾語(埋め込み)に變換している。日本語は中國語に比べて埋め込み構造を取りやすい言語であるため、翻譯に際してこのような操作が行

われることは珍しくない。<sup>13)</sup>

中國語では、比較的獨立した節が連續することによって複合的に文を形成していることが多い。完全に獨立した節が連續しているわけでも、節が完全に埋め込まれてしまうのでもなく、比較的獨立しつつ、連續しているという曖昧な點が中國語のテキスト形成に重要な役割を果たしていると考えられる。句點で終わりにしても、讀點でつなげてよい場合が少なくないのも、このためである。

「流水文」と呼ばれてきたような複雑な複文の形式的な記述は、王文斌・趙朝永が示したように「SP<sub>1</sub>+SP<sub>2</sub>+SP<sub>3</sub>…SP<sub>n</sub>」とすることができ、Sは主語、Pは述語を表す。この主語(S)はない場合が多く、その場合には述語(P)のみになる。嚴密に言えばこれに修飾語句などが加わるが、概略的な記述としてはこれでよいと思われる。「流水文」とは、このようなSPが比較的多く連なったものであるが、先行研究ではSPがどの程度續けばよいのか、SP間の關係がどの程度複雑であればそう呼んでよいか曖昧である。實際には、SPが二つからなる比較的單純なものから多數連なるものまであるし、SP間の關係も多様である。このため文法的には「流水文」というよりは、「連續serialization」と呼んだ方が適切だろう。「流水文」とは「流れる水のように感じられる」という修辭的な印象からきた命名と考えられる。ため、修辭的な側面を捉える用語としたほうがよいと思われる。「連續」の言語學的な研究もまだ途上であり、口語でも多い(日本語等でも口語では流水文的になると思われる)が、中國語では口語だけでなく、小説文のような書き言葉でも「連續」を發展させてきた。小説文における修辭的な側面の文學的研究はほぼないと言つていい。本稿では「連續」を用いた文が長く續き、「流れる水のように」に感じられるよう

になったようなものの修辭的な側面を明らかにしようとするもののである。

一般に、埋め込みを含む從屬節を取る方が修辭的に複雑だと考えられている。<sup>14)</sup>とすれば中國語は單純な構造なのかというと、必ずしもそうは言えない。むしろ、歐米言語等に見られるような「從屬節」(從と主の上下關係が明確)ではない形、すなわち「連續」を用いる形で修辭的な習慣も發達させてきたと考えられる。

### 三、流動する敘述と連結機能を持つ中間節

「埋め込み」ではなく「連續」によって複雑な觀念を表すとき、なぜ「流れる水のように」に感じられることがしばしばあるのだろうか。

(五) 因入山采药、遇一老人、碧眼童顔、手執藜杖、喚角至一洞中、以天书三卷授之曰、(それで山に入って薬を取りに行くと、一人の老人にあった、碧眼童顔で、手には藜の杖を持っている、張角を洞窟の中へと呼ぶと、天書三卷を授けて言った。)<sup>15)</sup>

(五)は「張角が」山に薬を取りに行つた↓(張角が)老人に會つた↓(その老人は)碧眼童顔だつた↓(その老人は)手に藜の杖を持っていた↓(その老人は)張角を洞窟の中へと呼んだ」となつていて、途中で主語が交替しているが、その主語は明示されていない。それでも中國語話者には誤解が生じる可能性はないと言つていい。第一、第二標點節は張角の行動であるが、第二標點節の目的語の位置に「老人」が来ると、次の第三標點節、第四標點節にはその「老人」の形容、状態の敘述が續いている(なお、本稿では讀點から讀點までを一つの單位として分析する。このため、便宜上その單位を「標點節」と呼ぶことにする)。さらに第五標點節ではその老人を主語とする動詞句へと展開してい

る。論理的に考えるならば、第三標点節の前に「那老人」のような主語が省略されていることになる。だが、少なくとも表層上はその主語は出てきていない。むしろ、第二標点節の末尾で「老人」が提起され、それに直接その形容が続いているように讀める。そしてそのまま「老人」を非明示的主語とする動詞句へと展開している。「連續」ではこのように、前の節の目的語に現れた名詞句の形容を續けることも可能なのである。

(五)の敘述が流れていくように感じられるのは、主語が切り替わっているためだけではない。動詞句が二つ續いたと思つたら、その形容に切り替わり、さらにまた動詞句に切り替わっているためでもある。まとめれば「(張角の)行動↓(老人の)描寫↓(老人の)行動」と敘述が轉々としていくことがわかる。とはいえ、急に切り替わるわけではなく、流れる水のようにスムーズに、氣が付くとタイプの違う敘述へ變化してしまうのである。なお、(五)は傳統的な白話小説から取つた例であり、流水文の特徴も歴史的に發展してきたものであるが、本稿では現代文學、特に八〇年以降のテクストを用例として用いることとする<sup>16)</sup>。

次に、「是」が使われる節を含む文の例を擧げる。

(六) 故郷八月、是多霧的季节、也许是地势低洼土壤潮湿所致吧。  
(故郷の八月は霧の季節だ。たぶん地勢が低く、土壤が濕氣をおびているからだろう。)

(六)の第二標点節「是多霧的季节(霧の季節だ)」は第一標点節を主語としているが、第三標点節はそうではない。「AはBで、(Bは)C」の構造となっている。つまりCに當たる第三標点節はAに當たる第一標点節とは直接關係を結んでいない。中間に置かれているBは、

Aに對して述語になつてゐるのに對して、Cに對しては意味からすれば主語に近い役割を果たしている(形式上はCの主語は現れていない)。とすればBにあたる第二標点節は、このように統合されることによつて述語兼主語のような働きを擔つてゐるように感じられる。B自體は不變でありながら、Aとの關係におけるB、さらにBとの關係におけるCで、その役割が變化してしまふ。つまり、敘述が流れていくように感じられる要因は、Bにあるのである。このような標点節を「連結機能を持つ中間節」と呼ぶこととする<sup>16)</sup>。Cは、Bに付加されているのであつて、Aに付加されているのではない。

後半の節が前半の節と直接關係を持つていない例を他にもみる。

(七) 小島上并不寂寞，有时可见树上一些铁甲子鸟，黑如焦炭，小如拇指，叫得特别干脆宏亮，有金属的共鸣。(小さな島でもさして寂しくはない。樹上の鎧鳥を目にすることもある。コークスのように眞つ黒で、親指のように小さくて、とりわけ高く澄んだ聲で鳴き、金屬的な共鳴がおこる。)

(七)では、第二標点節の目的語の位置に「鉄甲子鳥(鎧鳥)」が登場すると、續く第三標点節から五標点節まで「黑如焦炭，小如拇指，叫得特别干脆宏亮(コークスのように眞つ黒で、親指のように小さく、とりわけ高い聲で鳴き)」とその鳥に關する形容が連續している。だが最後の第六標点節「有金属的共鸣(金屬的な共鳴がおこる)」はその直前に出てくる「叫得特别干脆宏亮(とりわけ高い聲で鳴き)」についての補足である。つまりここでは、「鳥は寂しくない(A) ↓ 鎧鳥も見られる(B) ↓ その色の形容(C) ↓ その形の形容(D) ↓ その鳴き聲の形容(E) ↓ 鳴き聲の形容の説明(F)」と流れるように展開されているのである。ここでは、A ↓ Bと展開した上で、そのBに對してC-Eが並列的に連續している。とすると、C-EはAとは關係せず、Bに付

加されたものである。さらに、FはEに付加されたものである。まとめれば、「連続」においては、直前の節との關係だけで新たな節を追加できる。このために後半の節が前半と直接關係を持つていないことも多い。敘述が「流れる水のように」に感じられるというのは、このような特徴のためであると考えられる。

では、このような構造を取っていると、どのような修辭的な効果を持つだろうか。

#### 四、「流水文」の修辭分析

「埋め込み」と異なり、「連続」では、連続する節が比較的獨立している。埋め込まれた節は主節に從屬するため、背景化されやすい。一方、「連続」では從屬しないので、背景化されず、觀念が並列されているように感じられる。このため、讀者としては並列された觀念から觀念へと、まさに流れる水のように、順番に認知していくことになる。

(八) 姑娘们就怔望着胡乡长，又彼此看了看，便重又散到那市里，花花绿绿，像一片开在市街上的花。(娘たちははばかんとしたまま胡郷長を見つめ、お互い顔を見合わせると、再び市内に散って行つた。色とりどりに、市の通りに咲いた花のように。)

(九) 就看见孔明耀再次从家里出来，身后跟了无数的孔姓人，男的女的，少少老老，个个脸上都没了先前和润的光。(孔明耀が次に家から出て来たとき、無数の孔姓の、男も女も、子どもも老人も、その後ろからついてきているが、それぞれの顔に、先ほどまでのつややかな光はなくなっている。)

(八)の第一標點節から第三標點節までは、「姑娘们(娘たち)」を主

語とする動詞句の連続である。そして最後の第三標點節で敘述された行爲「便重又散到那市里(再び市内に散って行つた)」に對して、その様子を第四標點節で「花花绿绿(色とりどり)」であるとし、さらにその「花花绿绿」を第五標點節で「像一片开在市街上的花。(市の通りに咲いた花のように)」とさらに廣げている。つまり「行動A↓行動B↓行動C↓行動D」の形容D↓Dに對する判断E」と流れている。第三標點節がその流動を擔う「連結機能を持つ中間節」となっていると云えるだろう。(九)の第二標點節では、孔姓の人たちが孔明耀の後ろについてきていることが敘述されている。するとその「後ろについてきている孔姓の人たち」の詳細情報として第三標點節、第四標點節が追加される。第五標點節は第三標點節、第四標點節を意味上の大きな主語とし、その「それぞれの顔」に關する敘述が連續している。第三標點節と第四標點節が「連結機能を持つ中間節」である。

このように書くとき、單に讀點と句點の使い方の問題ではないかと思われるかもしれない。實際、「身后跟了无数的孔姓人」の後を句點にすれば、日本語でもそのまま譯せそうである。しかし、中國語の「連續」では意味的には修飾する要素を後續させられるのだから、「男的女的，少少老老」はその前の、「身后跟了无数的孔姓人」を具體的に表したものととして讀む。「男的女的，少少老老」は次に「个个脸上都没了先前和润的光。」が連續して初めて、その後續する節に對する意味上の主題に變化するのだ。

このような構造では、「孔姓の人たちがついてきている↓男も女も、老いも若きも↓その顔」というように、付加されている順番に從つて並列的に認知していく。その前に出てくる要素に付加されるため、敘述が少しずつ流れ、動いているように感じられるのである。

次の例の第二標點節はどうだろうか。

(十) **我用手抓住，方方的一块，被来娣的热手托着。**（手でつかんでみると、四角い物が来娣の手の中にあつた。）

この「**方方的一块（四角い物）**」は、順番に読んでいくとすると「**抓住（つかむ）**」の目的語に當たるように思われる。とするならば、「**我用手抓住了方方的一块（私は手で四角い物をつかんだ）**」のように言つてもよさそうである。しかしそうなつてはいない。(十) のようにすることによつて、「**四角い物をつかんだ**」のではなく、つかむという動作行為を行つた結果として、**四角い物である**と人物が氣づき、そしてそれが「**来娣の手の中にある**」のだ、と讀者は順番に認知する。日本語版の「**手でつかんでみると、四角い物が来娣の手の中にあつた。**」のように、「**手でつかんでみると**」を從屬節にして、「**四角い物が**」を主語にする形にすると、原文とは受ける印象が異なつてくる。「**流れる水のように**」な印象は、翻譯が難しい。

連續構造に前置詞句が入り込んでくる場合にも、流動して感じられることがある。

(十一) 一九四三年二月，美国《时代》周刊记者白修德、英国《泰晤士》报记者哈里逊·福尔曼去河南考察灾情，在母亲煮食自己婴儿的地方，我故乡的省政府官员，宴请两位外国友人，**宴请两位外国友人，**（一九四三年二月，アメリカの週刊『タイム』の記者、セオドア・ホワイトと、イギリスの『ロンドン・タイムズ』の記者、ハリソン・フォアマンは、飢饉の状況の調査をするために河南に行つた。母親が自分の赤ん坊を煮て食べたというその場所、わが故郷の省政府の役人が二人の外國の友人をもてなしたメニューは）  
(十二) **我喂十头，破老汉喂十头，在同一个饲养场上。**（同じ牛飼いで、わたしが十頭を、破じいさんが十頭を飼つた。）

中國語「流水文」とその修辭的特徴について

(十三) **鬼子和伪军刚一出院，奶奶就揭开一只瓮的木盖子，在平静如镜面的高粱烧酒里，看到一张骇人的血脸。**（鬼子が引きあげると、祖母は一つの甕の木蓋をとつた。鏡のように靜かな高粱酒に、血まみれのすさまじい顔がうつる。）

(十一) では、第三節で二人の外國人記者が河南に被災状況を調査に行つたことが語られる。すると次の節では「**在母亲煮食自己婴儿的地方（母親が自分の赤ん坊を煮て食べたというその場所）**」と、その河南から連想される前置詞句が續いている。これももちろん、「一九四三年二月，美国《时代》周刊记者白修德、英国《泰晤士》报记者哈里逊·福尔曼去河南考察灾情。（一九四三年二月、アメリカの週刊『タイム』の記者、セオドア・ホワイトと、イギリスの『ロンドン・タイムズ』の記者、ハリソン・フォアマンは、飢饉の状況の調査をするために河南に行つた。）」と「**在母亲煮食自己婴儿的地方，我故乡的省政府官员，宴请两位外国友人，**」(母親が自分の赤ん坊を煮て食べたというその場所、わが故郷の省政府の役人が二人の外國の友人をもてなしたメニューは、)の二つの文に分けることが可能で、そのように分けるとするならばそれぞれはごく普通の構造となるし、そのまま日本語に翻譯することもできる。しかし「**在母亲煮食自己婴儿的地方**」というのは、明らかにその前の節で出てくる「**災害に見舞われている河南**」を言い換えたものである。前置詞句ではあるが、「**災害に見舞われている河南**」母親が自分の赤ん坊を煮て食べたというその場所」へと並列的に、流れる水のように觀念が移行する。

また、「**在母亲煮食自己婴儿的地方**」を單純にその後ろ側にかかる前置詞句であるのにもためらいがある。中國語の連續構造では(十二) のような例も出てくるからである。(十二) では、「**在同一个**

飼養場上。(同じ牛飼いで)が最後に来て、しかもここで文が終わりつつある。意味的に言えばこれは第一標點節と第二標點節の行われる場所を表している。場所を表している前置詞句であるならば、基本的には動詞句よりも前に来るはずだが、そうはなっていない。第一標點節で私が牛十頭の餌やりをしていること、第二標點節で破じいさんが牛十頭の餌やりをしていることを述べたうえで、付加的に「同じ牛飼いで場だった」と連続させていると考えられる。こうしてみれば、前置詞句を後ろに連続させることもありうるわけで、(十一)の「在母亲煮食自己婴儿的地方」も、單純にその後ろ側に来る「我故乡的省政府官员、宴请两位外国友人的菜单是」とだけ關係を持つているだけとはいいたくない。讀者としても「去河南考察灾情」に續き、「河南」の説明が來ていると認知する。次が來ることによつてはじめてこの部分が前置詞句であるとわかるのであり、やはり「連結機能を持つ中間節」である。

(十三)もほぼ同様に「在」を使つた前置詞句が出てくる。第二標點節では、甕の木蓋を取ることが敘述されており、當然、關連のある事柄として「甕の中に何があるか」が期待される。そこで第三標點節で甕の中を敘述する「在平静如鏡面的高粱烧酒里(鏡のように靜かな高粱酒に)」へとつながっている。構造上は、第二標點節で一回切れるようにも思えるが、最後の標點節「看到」の主語は第二標點節と同じく「奶奶」であるから、第二標點節で分割できるとは單純には言えない。中國語の意識としてはやはり、「木の蓋を取る↓その中に入っている高粱酒↓高粱酒に移る顔」へと、流れるように敘述が移行していると考えられるのである。

同じような構造を日本語からの翻譯で見してみる。日本語原文と中國

語譯の順に示す。

(十四) さつきまで乗っていた眞新しい黒のトヨタ・クラウン・ロイヤルサルーンが、ずっと向こうに見えた。午後の太陽の光を受けて、フロントガラスがミラーグラスのようにまぶしく光っていた。

刚才乘坐的那辆崭新的丰田车停在远处，在午后阳光的照耀下，挡风玻璃像镜子般反射出耀眼的光芒。

(十四)の中國語譯では、第二標點節が「連結機能を持つ中間節」になっている。第一標點節からの流れで言えば第二標點節は「丰田车(トヨタの車)」を主語とする動詞句ととれる。そのように取るならば、「トヨタの車が遠くに停まっており、午後の太陽の光のもとにあった」と解釋できる。ところが、第三標點節まで讀むと、第二標點節は前置詞句になっていると讀むことができる。しかしそれは分析的に考えた場合で、この文を線形順序に従つて讀むならば、「トヨタの車が遠くに停まっている↓午後の光の下にある↓フロントガラスが光を反射している」と流れるように、順番に認知していくはずである。

以上のように、「流水文」の修辭的な最大の特徴は、背景化されず、並列された觀念間が、スムーズに、順を追つて展開していく點であると言える。並列になるからと言って、單調になるわけではない。中國語ではこの構造を發展させてきたのである。

## 五、動きのある描寫

中國語の「連續」では、一つの標點節で一つの時間的展開を示したり、空間的敘述對象を一つずらしたりすることができる。この特徴によつて、流動する文が、流動する描寫を生み出すことが時としてある。まず短いものから見ると。



(十五) 舞厅酒吧已经像枯叶一样消失了, 入夜的城市冷冷清清, 店铺稀疏残缺的霓虹灯下, 有一些身份不明者蜷缩在被窝里露宿街头。(ダンスホールやバーはすでに枯れ葉のように消えていた。夜になった都會はひっそりとして、店舗はまばらで、不揃いのネオンのもと、数名の浮浪者が身を縮めて街頭で野宿していた。)

(十五) の第三標點節「店舗稀疏残缺的霓虹灯下(店舗のまばらで不揃いなネオンの下)」は、意味からいえば第四標點節「有一些身份不明者蜷缩在被窝里露宿街头。(数名の浮浪者が身を縮めて街頭で野宿していた。)」の場所を表しているから、第四標點節に從屬している。だが、第一標點節、第二標點節がこの物語現在の描寫となつてゐるため、その續きとして讀み進めてくると、この第三標點節もこの物語現在における描寫の續きのように感じられる。並列的に並んでゐるために、第三標點節は第二標點節から續くこの場面の描寫でありつつ、第四標點節の場所になるといふ、二重の役割を果たしてゐるように讀める。並列的なので、敘述に從つて一つずつ存在物を讀んでゐるようになる。より長い例を見る。

(十六) 坐在叔叔的屋顶上, 许三观举目四望, 天空是从很远处的泥土里升起来的, 天空红彤彤的越来越高, 把远处的田野也映亮了, 使庄稼变得像西红柿那样通红一片, 还有横在那里的河流和爬过去的小路, 那些树木, 那些茅屋和池塘, 那些从屋顶歪曲曲升上去的炊烟, 它们都红了。(叔父の家の屋根に上がつて、許三觀は四方を見渡した。空ははるか遠くの畑のあたりから廣がつて、どこまでも高く、眞つ赤に染まつてゐる。遠くの田畑にもその色が映り、作物はみなトマトのように赤く見えた。その近くを流れる河も、くねくねと續く細い道も、樹木、草ぶきの家、貯水池、そして屋根から立ち上る炊煙も、すべて赤く色づいてゐた。)

中國語「流水文」とその修辭的特徴について

中國語の修辭的な特徴は、日本語譯されたものと比較するとわかりやすいだろう。第三標點節から第四標點節を「空ははるか遠くの畑のあたりから廣がつて、どこまでも高く、眞つ赤に染まつてゐる。」と譯している。標準的な翻譯であるが、この日本語では「空は」を主語とし、述語として「畑のあたりから廣がつてゐる」「どこまでも高い」「眞つ赤に染まつてゐる」が付與される形であり、靜的な描寫である。ところが中國語原文はそうではない。風景描寫と時間經過がうまく絡まりあい、動きのある描寫となつてゐる。まず「泥土里升起来的」とあるので、「泥(畑)から空が登つてくる」という動態的な比喩表現である。次の「天空红彤彤的越来越高」でもその「空」が眞つ赤な状態をしながら「どんどん高くなつていく」という動態的描寫になつてゐる。もちろん、空が高くなつていくことは客觀的にはあり得ないが、地平線から立ち上つていく様を動態として描いてゐるのである。また第五標點節と第六標點節は「遠くの田畑にもその色が映り、作物はみなトマトのように赤く見えた。」と譯されているが、この日本語も靜的描寫になる。對して原文は「天空」を動作主とする動詞句文で、第五標點節では遠くの原野を赤く染めたこと、第六標點節では作物をトマトのようにしたことが語られる。つまり第三標點節から第六標點節まではひと續きの動態的な描寫であり、讀者からすると、空が高く上がつていき、赤くなり、田野を染め上げ、さらにその作物へと一つずつ標點節を追うごとにイメージを展開することになる。動詞句の連續を使うことによつて、時間的展開が感じられ、空間も動いているような印象になる。

次の第七標點節から第十標點節名詞句の連續では、赤く染め上げられる對象を表している。客觀的に言えば、第七標點節から第十標點節

までの存在物は同一平面上に存在している。だが、前半が動きのある描寫で、その流れの後にくる名詞句の連続であるため、語られる順番ごとに描寫が移っていくように感じられる。日本語譯のように、「主語+述語」の構造で文を細かく切っていくと、論理的に説明している印象になり、中國語原文のような印象は生まれない。中國語の印象をそのまま日本語で再現することは難しい。

(十七) 飯店看上去没有门，门和窗连成一片，中间只是隔了两根木条，许三观他们就是从旁边应该是窗户的地方走了进去，他们坐在了靠窗的桌子前，窗外是那条穿过城镇的小河，河面上漂过去了几片青菜叶子。(一見したところ、店には出入り口がない。實際は窓とつながっていて、二本の棒で仕切つてあるだけなのだ。許三觀たちはわきのほうの、本來は窓である場所から入り、窓際の席にすわつた。窓の外に、町なかを流れる河が見える。水面には青菜の葉が漂っていた。)

(十七) の第三標點節までは靜的な描寫である。第一標點節の最後に「門(出入り口)」が提示され、第二標點節はそれと關連する「門和窗(出入口と窓)」の敘述、第三標點節は第二標點節で提示されたものの一部分に焦點が當てられている。この狀況設定の中に第四標點節では登場人物・許三觀が登場し、行動を行う。第五標點節も許三觀の行動である。この第四、五標點節で時間が進められると、店の中にある窓際の席に視點が移される。するとその先の敘述はその窓から見える河に移り、さらにその河の上を流れる青菜に焦點が移される。許三觀の行動以外は靜的な描寫であるが、一つの流れに組み込まれることによって、動きのある描寫のように感じられるのである。

## 六、日本語譯、英語譯との對照

中國語の特徴をより明らかにするために、日本語譯・英語譯との對照も簡單に行つておく。莫言の『赤い高粱』から例を見る。

(十八) 他的坟头上已经枯草瑟瑟，曾经有一个光屁股的男孩牵着一只雪白的山羊来到这里，山羊不紧不忙地啃着坟头上的草，男孩子站在墓碑上，怒气冲冲地撒上一泡尿，然后放声高唱；(枯れ草が風に震えるころ、その墓に、尻を丸出した一人の男の子が一頭のまっ白な山羊を引いてやつてきた。山羊はゆつくりと墓の上の草をはむ。男の子は墓碑の上に立ち、怒りにまかせて地べたに放尿してから、聲はりあげてうたった。)

(十八) では、最初の標點節で墓とその形容がされている。この第一標點節が場所として提示され、第二標點節で男の子が山羊を連れて來たことがあることが語られる。第三標點節では第二標點節で出てきた山羊が主語になっている。續く第四標點節から第六標點節までは男の子を主語とする動詞句の連続である。このようにされることで、「墓(場所の提示) ↓ その墓にやつてくる男の子と山羊(主體の提示) ↓ 山羊の動作 ↓ 墓の上にたつ男の子 ↓ その男の子の動作」という流れが一つの出來事としてまとめ上げられていることになる。山羊の動作と男の子の動作は同時的なので、嚴密に言えば先ほどまでの例とはやや異なつている。中國語としてはこのように、まず空閒を提示し、そこに出現する二つのものを提示したら、その二つの行爲を一つずつ描き、なおかつそれを一つの「文」としてまとめることは極めて自然である。流れるような敘述に感じられるのは、各標點節が論理的關係性を結んだり、從屬的な關係になつたりするのではなく、並列的に連續しているからだと考えられる。

日本語譯では、第一標點節を「枯れ草が風に震えるころ」と時を表す從屬節にして第二標點節につなげている。また、第二標點節を譯し終えたところで一度文を切っている。第二標點節で表される「山羊を引いてやってきた」ことと、その山羊が「墓の上の草をはむこと」の間には從屬的な關係がないし、並列的な關係もないため、日本語としてはこのほうが自然であろう。

考えてみれば、中國語のようにある一定の枠内で起る動作を一つのみとまりと考えるのは必ずしも不思議なことではない。英語や日本語ではそうしたまとめ方を取るのが規範的ではないだけである。英語譯ではどのような構造になっているだろうか。

A bare-assed little boy once led a white billy goat up to the weed-covered grave, and as it grazed in unhurried contentment, the boy pissed furiously on the grave and sang out:<sup>(18)</sup>

この英語譯では、「尻を丸出しにした男の子」が一貫して動作の主體であり、その動作がいくつつか and で連結されている。このように、英語でも一つの主體の連續する動作は比較的表出しやすい。しかし、羊の動作は從屬節に變形させられ、男の子の動作に從屬する形になっている。原文とこの英語譯では、表されている内容はほぼ同じではあるが、修辭的構造が異なるため、讀んだときの感觸も異なる。中國語は「空閒提示↓そこに現れる羊と少年↓羊とその動作↓少年の動作」と、並列的に連續していくので、提示されている場所も、羊の動作も背景化されていない。敘述の順番に従って、並列的に一つずつそれを讀んでいくことになる。同じく莫言の『赤い高粱』からもう一例見

(十九) 父亲紧紧扯住余司令的衣角，双腿快速挪动。奶奶像岸愈离愈

中國語「流水文」とその修辭的特徴について

远，雾像海水愈近愈汹涌，父亲抓住余司令，就像抓住一条船舷。

余司令の服のはしをつかんで、父は驅けるように兩足を動かした。祖母の姿は岸のように遠ざかり、霧は近づきつれて海水のようになってきた。父は船べりをつかむように、余司令につかまっていた。

Gripping tightly to Commander Yu's coat, he nearly flew down the path on churning legs. Grandma receded like a distant shore as the approaching sea of mist grew more tempestuous; holding on to Commander Yu was like clinging to the railing of a boat.<sup>(19)</sup>

(十九)の最初の文「父亲紧紧扯住余司令的衣角，双腿快速挪动。」では、中國語では「父亲」を主語とする構造になっている。日本語譯では、「余司令の服のはしをつかんで」を從屬節にし、主語の「父」を「驅けるように兩足を動かした」のほうに移動させている。英語譯を見ると、從屬節―主節の構造關係がより明確な翻譯になっているのがわかる。

そして、さらなる問題は原文で言えば二文目「奶奶像岸愈离愈远，雾像海水愈近愈汹涌，父亲抓住余司令，就像抓住一条船舷」である。日本語譯は、まず「祖母の姿」を主語にする節と、「霧」を主語とする節からなる文を作って一回閉じ、次に「父」を主語とする文に翻譯している。この構造では、「AはB、CはD」というのが一文目、二文目は「AはB」という分析的な形になっている。英語はas the approaching sea of mist grew ore tempestuousと、日本語が「霧」を主語にして翻譯したところを完全な從屬節に變えている。このため、主語と述語が一つずつからなる文が二つに翻譯されており、それ以外の要素はすべて從屬する要素である。しかし、原文の中國語は「祖母が岸のようにどんどん遠ざかって離れること」「霧が海水のよう

にどんどんわきたつこと」「父が余司令をつかんでいること」「その様子が船をつかんでいるよう」であることの四つは、それぞれ比較的獨立しており、それほど從屬していない。從屬節化されている日本語譯や英語譯では、從屬節部分は背景情報となるが、原文はそうはなっていない。ほぼ同じことを述べているのにもかかわらず、中國語原文を讀んだ時の感觸と、日本語・英語譯を讀んだ時の感觸は異なる。

さて、ここまで出版されている日本語譯や英語譯を参照に中國語の修辭的特徴を考察してきている。これは、「この譯ではまずい」とか、「別の譯し方ができる」と述べているわけではない。日本語や英語では同じような印象を再現することが難しいことを例示しているのである。日本語や英語でも無理やり並列構造に變えられないことはないが、その場合には稚拙な印象になってしまう。個別言語の規範は表現方法を規定するし、その表現によって讀者の讀み方も變わってしまうのである。

## 七、高行健の「言葉の流れ」

冒頭で取り上げたとおり、高行健の特徴的な文體も、中國語の「流水文」的な特徴を應用したものであると考えられる。冒頭に擧げた(一)は「おまえが乗った長距離バス↓おんぼろの車體↓おんぼろの車體の説明↓でこぼこの道」と描寫してきたところで、そのバスに揺られ、山間の縣城に至ることが表される。バスの描寫も道の描寫も埋め込まれず、一つの流れの中で語られるし、後半の移動を表す動詞句と一體となることによって、靜的な描寫と動きが一つの言葉の流れの中で表される。橋本は(一)を次のように書き換えて比較している。

(二〇) 城市里淘汰下来的车子在保养得极差的山区公路上走过去。

(都市では使わなくなった車が、補修の行き届いていない山の道を走っている。)

この書き換えた方は、埋め込み構造を使っており、連續構造をとっていないので、「流水文」にはなっていない。「AがBであるような背景の中で人物CがDした」という場合、人物の行動が主人であつて、それを取り巻くものは從屬する「背景」でしかなくなる。しかし連續構造では「Aで、Bで、Cで、D」という形をとり、すべての要素は同格になってしまう。車が提示され、道が提示され、その流れの中で人物が登場する。人物が提示されたならば、その連想として次のフレーズではその行動が示される。このようにすることによって、人物の行動も空間の動きの中に溶け込むことになるのである。橋本が擧げる別の例も、本稿の觀點から分析してみよう。

(二一) 你于是来到了这乌伊鎮、(人物↓行動↓烏伊鎮) 一条鋪着青石板的长长的小街、(烏伊鎮の青石の敷かれた道) 你就走在印着一道深深的独轮车辙的石板路上、(その道の上を歩く人物) 一下子便走进了你的童年、(歩く↓過去へ) 你童年似乎待过的同样古旧的山乡小镇。(そして、おまえはこの烏伊の町へやつて來た。黒い石を敷いた通りが長々と續いている。おまえは手押し車の轍が深く刻まれた石畳の道を歩いているうちに、すぐ子供時代の記憶の中に入つていった。おまえはどうやら、ことと同じような山間の古い町で子供時代を過ごしたらしい。)(原文十六頁、日本語譯版二六頁)

第一標點節では、人物「你」が烏伊鎮にやつてきたことが語られる。第二標點節はその烏伊鎮の黒い石が敷かれた道が名詞句で提示される。前に出て來た要素の詳細説明(もしくは一部分)を名詞句で連續させるのは、よくある構造である。さらに第三標點節では、その道を

歩く人物の行動が描かれ、さらに第四標點節では過去へと歩き入ることが示されている。一つの流れの中で、時間的な展開も行っているのである。そして最後の第五標點節では烏伊鎮を説明する名詞句に戻っている。このようにすることで、読者としても第一標點節で「你」が烏伊鎮に歩き入ることが示され、次にその道を認知したと思うと、その道歩く「你」がフレームインしてくる。さらに、モニター・ジュ効果のようにその畫面が過去の色彩を帯び、最後にその烏伊鎮の説明・判断が續くという流れが、一つの言葉の流れで示されるのである。

## 八、まとめ

以上、「流水文」と言われたような文の修辭的な特徴を分析してきた。中國語では、複雑な文を作るのに關係節や連體修飾のような埋め込みや、「背景となる」從屬節―(焦點となる)主節―のような構造を使うのではなく、次々に要素を連續させることよって形成する「連續」をとることが多い。「連續」では、要素が並列的に並んでいくので、その出てくる順番に従って読者も認知する。その前に出てきた要素に對して新しい要素が付け加えられていくため、途中で意味上の主語が変わったり、靜態的な描寫から動態的な描寫に移ったりもする。このように展開していくことが「流れる水のように」に感じる要因であり、「流水文」なる名稱が生まれた要因でもある。

作家は、新たな表現を模索するものの、個別言語における文法や表現の習慣から自由ではない。「連續」の在り方は、中國語の複雑な「文」を考える上で、文法的にも表現論的にも重要である。さらなる追求が必要となるであろう。

## 注

- (1) 高行健『靈山』(天地圖書、二〇〇〇年)、『靈山』(飯塚容譯、集英社、二〇〇三年)、『Soul Mountain, translated by Mabel Lee, Flamingo, 2001.
- (2) 橋本陽介「高行健の『靈山』における語る聲の流動と「言葉の流れ」『日本中國學會報』(六十集、二〇〇八年)。
- (3) 前掲注(2)參照。
- (4) 呂叔湘『漢語語法分析問題』(商務印書館、一九七九年、二七頁)。
- (5) 流水文の主な先行研究としては、胡明揚・勁鬆「流水句初探」、『語言教學與研究』(一九八九年第四期)、吳竟存・梁伯樞「現代漢語句法結構與分析」(語文出版社、一九九二年、三二六頁―三五二頁)、沈家煊『零句』和『流水句』―爲趙元任先生誕辰120周年而作』、『中國語文』(二〇一二年第五期)、王洪君・李榕「論漢語語篇的基本單位和流水句的成因」、『語言學論叢』(商務印書館、二〇一四年)、王文斌・趙朝永「漢語流水句的分類研究」、『當代修辭學』(二〇一七年第一期)、許立群「從『單複句』到『流水句』」(學林出版社、二〇一八年)などがある。
- (6) 橋本陽介「中國語書き言葉における「文」論序説」、『お茶の水女子大學人文科學研究』一五卷(二〇一九年、一六一―一七二頁)、橋本陽介「現代中國語における時間軸に沿って繼起的に起こる出來事と連續構造」、『お茶の水女子大學中國文學會報』三八號(二〇一九年、一一―一八頁)。
- (7) Givón, Talmy. *Grammatical Relations: a functionalist perspective*, John Benjamins Publishing company, 1997, p.55.
- (8) 注(5)。(6)前掲論文他、橋本陽介「中國語における性質・狀態性敘述を含む連續構造」、『お茶の水女子大學人文科學研究』一六卷(二〇二〇年、一四三―一五五頁)。
- (9) 前者は黃錦炎譯『百年孤獨』(瀉江出版社、二〇〇三年、一頁)。後者

は范曄譯『百年孤獨』（南海出版社、二〇一一年、一頁）。日本語譯はガブリエル・ガルシア・マルケス『百年の孤獨』（鼓直譯、新潮社、一九九九年、五頁）による。なお、原文では「太った」に當たる部分だけが前置修飾の形容詞、髭がぼうぼうであることと手が雀のようであることは前置詞<sup>20)</sup>で導かれた節、それ以外は關係節になつてゐるので、語順としては後者の方が近いが、埋め込まれてゐるという點では前者のほうが近い。

- (10) 中國語はSVO言語の中では類型論的に唯一、連體修飾・關係節が前置されるとされた（劉丹青編『名詞性斷語的類型學研究』商務印書館、二〇一二年、邦譯は『中國語名詞性フレーズの類型學的研究』山田留里子他譯、日中言語文化出版社、二〇一六年）他。しかし沈家煊前掲注(5)論文では、中國語では實際には長い連體修飾語が使われるよりも、「流水文」の形で修飾される要素が後ろに續くことが多く、そうすると類型論的な矛盾も解消されると考へてゐる。本稿の言い方で言えば、埋め込みは前置されるが、「連續」では後置される。長い連體修飾語が使われるようになったのはいわゆる歐化語法である（謝耀基『現代漢語歐化語法概論』光明圖書公司、一九九〇年）。

- (11) 莫言『紅高粱家族』（南海出版社、一九九九年、五頁）、日本語譯は井口晃譯『赤い高粱』（岩波現代文庫、二〇〇三年、九頁）。
- (12) 王小波『黃金時代』（北京十月文藝出版社、二〇一七年、三頁）、日本語譯は櫻庭ゆみ子譯『黃金時代』（勉誠出版、二〇一二年、三頁）。
- (13) 日本語と中國語の修飾語を巡る對照研究としては堀江薫・ブラシャント・バルデシ『言語のタイポロジー』（研究社、二〇〇九年）、小野秀樹「中國語における連體修飾句の意味機能」『木村英樹教授還曆記念中國語文法論叢』（白帝社、二〇一三年）、陳風『連體修飾の日中對照研究—限定的修飾を中心に—』（牧歌舎、二〇〇九年）など。また、楊凱榮

『中國語學・日中對照論考』（白帝社、二〇一八年、二四九—二七八頁）では、日本語のほうが連體修飾を用いやすい理由について考察されている。中國語では「連續」であらわされているものが日本語では連體修飾・連用修飾に譯されてゐることが多い。その方が日本語として自然という意識が働いてゐると思われれる。

- (14) 例えば、ドイツチャーは、複雑な社會ほど從屬節に依存しがちであるとし、ヒッタイト語、アッカド語、聖書のヘブライ語など、古代の敘述體では從屬節が未發達なために出來事を時間順に並べるしかなく、單純で眠氣をさそうものであると論じてゐる（ガイ・ドイツチャー『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』椋田直子譯インターシフト、二〇一二年、一四九—一五九頁）。

(15) 『三國演義』（人民文學出版社、一九七三年第三版、二頁）。譯は引用者。

- (16) もちろん、通時的な研究も必要となる。ただし、言語學的方法を用ゐる以上、通時的研究と共時的研究を一本の論文で同時に行うことは不可能であるため、本稿では通時的な記述は行わない。現在の句讀點の規範は五四時期以降に成立したものであり、それ以前には使われていなかったとはいへ、句讀點が使われ始めてからは、その存在を輕視するべきではない。なぜなら、記號は「このように讀むように」との指定であり、讀者もその指定の通りに讀むからである。本稿では、現在の句讀點の規範が成立してからのテキストを特に問題とする。

- (17) 『紅高粱家族』九頁、日本語譯版十七頁。
- (18) 前掲注(2)論文では「曖昧な中間節」と呼ばれてゐる。
- (19) 韓少功『爸爸爸爸』（山東文藝出版社、二〇〇一年、一〇〇頁）、加藤三由紀譯『爸爸爸爸』『現代中國短編集』（藤井省三編、平凡社、一九九八年、二五七頁）。

- (20) 閻連科『炸裂志』(河南文藝出版社、二〇一六年、四二二頁)、泉京鹿譯『炸裂志』(河出書房新社、二〇一六年、五六頁)。なお、日本語譯では吳鄉長となっているが、参照にした原文に合わせて變更した。
- (21) 『炸裂志』五六頁、日本語譯版七五頁。
- (22) 阿城『孩子王』、『棋王』(作家出版社、二〇〇〇年、九九頁)、立間祥介譯「中學教師」『チャンピオン』(徳間書店、一九八九年、一九六頁)。
- (23) 劉震雲『溫故一九四二年』、『劉震雲』(人民文學出版社、二〇〇〇年、三二三頁)、劉燕子譯・竹内實監修『溫故一九四二年』(中國書店、二〇〇六年、一二頁)。
- (24) 史鐵生『我的遙遠的清平灣』、『插隊的故事』(山東文藝出版社、二〇〇一年、六十頁)、松井博光他譯「わが遙かなる清平灣」『史鐵生』(現代中國文學選集三、徳間書店、一九八七年、一三頁)。
- (25) 『紅高粱家族』十四頁、日本語譯版二六頁。
- (26) 村上春樹『1Q84』(book1前編、新潮文庫、二〇一二年、三二二頁)、施小焯譯『1Q84』(南海出版社、二〇一〇年、一二頁)。
- (27) 「紅粉」八十頁、日本語譯版三二九頁。
- (28) 余華『許三觀賣血記』(南海出版社、一九九八年、二頁)、飯塚容譯『血を賣る男』(河出書房新社、二〇一三年、四一五頁)。
- (29) 『許三觀賣血記』十三頁、日本語譯版十六頁。
- (30) 『紅高粱家族』一頁、日本語譯版三頁。
- (31) Red Sorghum, translated by Howard Goldblatt, arrow books, 2003, pp.3-4.
- (32) 『紅高粱家族』一頁、日本語譯版三頁、英語版三頁。
- (33) 翻譯事例を並べるのは、個別的な事象であり、常に成立することではない。言語學的な「對照」だけを意味があると考えらるなら、このような論は適切ではないと思うかもしれない。しかし文學的翻譯論は、個別

中國語「流水文」とその修辭的特徴について

的な事例やその解釋を重視する。本稿が則る方法については橋本陽介『物語における時間と話法の比較詩學』(水聲社、二〇一四年)、橋本陽介「中國語書き言葉における「文」論序説」『お茶の水女子大學人文科學研究』一五卷(二〇一九年、一六一―一七二頁)を参照のこと。言語學的な對照は本稿とは別に行うものである。

※なお、本稿は科學研究費補助金(課題番號 19K20785)の助成を受けたものである。